

書評

柴谷篤弘『反差別論—無根拠性の逆説』(明石書店)

『科学批判から差別批判へ』 (明石書店)

柴谷さんの反差別論の特徴の一つはその同名の本のサブテーマ「無根拠性」ということで現れています。

これについては、部落解放運動の中で語られて来た有名なテーゼを引き合いに出して論及できます。「由ある差別も由なき差別もない」というテーゼですが、柴谷さんの「無根拠性」という論理は、「由ある差別はない」という一面性を取り上げています。何が抜け落ちているかという、「由なき差別はない」ということ、すなわち物象化された相で、差別には根拠があるということを、その由ということを掘り下げていないということです。

確かに差別について幾つかの規定が試みられています。

「差別の原因は、無知、あるいは非親近性にもとづく予想不可能性への忌避にあるとおもわれる」(『反差別論』125P)「これと同様に、いろいろちがった形をとるにせよ、差別が普遍的に人間社会にひろくみられることから、「差別の構造」が、人間に生得的に与えられている、と考えられる。しかし、最近の、反差別・人権のための運動が、世界の各地でもりあがってきていることや、歴史上の事件を見ても、差別・人権無視を不当とし、これとたたかうこともまた、人間に普遍的に見られる構造であると思われる。このように、差別と反差別の相反するふたつの構造が、人間の脳に、共にならんで生得的に与えられ、社会的なきっかけなどによって具現化する、と見るのが、構造主義的生物学の考えかたである。／この見方からすると、解放運動の共通の目標として、「差別をなくそう」という概念をかかげることは、「言語をなくそう」という概念と同じように、現実性のない、むしろ空疎な試みといわねばならない、なぜなら差別の構造は、われわれの脳のなかに、生得的につくりつけになっており、機会あるたびに具現化して、われわれの差別的言動を生成すると考えられるからである。だから、差別は決してなくならない、それはわれわれの脳とともにつねにあるのだ、と考えるほうが、消えるはずだのに残留し、なくなったとおもえばまた現れる差別の現実を、よく予測し、よく説明できるものである。／しかしまた、倫理、神(霊性または神性)、人権—反差別の構造もまたすべての人間の脳のなかに、いわば無償で、もともとつくりつけになっていると考えねばならない。この背反的な多種性こそが、人間の脳に(そしておそらく多くの動物の神経系にも)本来そなわった性質であろう、と私たちは考えている。かんじんなことは、これらの構造の存在理由は、無根拠であって、物理・化学的な法則から脳の生理学を通じて、必然的に唯一可能なものとして導かれるものではないだろう、という点である。」(『科学批判から差別批判へ』136～7<文中、「人権—反差別」というところでは、原文では、「人権／反差別」となっている。引用に際し、改行で「／」を使っているので、「—」を代用>)

前者に関しては、共同体の同心円的共同性と排他性ということで語られて来たことですが、これについては、定着農耕民族について言えても、他の民族にまで拡張できないとい

う指摘がでています（赤坂憲雄）。しかも、この場合の「忌避」には、オソレ意識についての論及と同じで、上下意識が必ず伴うものではありません。後者に関しては、理解しがたい論考です。「人と人との関係を自然的なものとしてとらえる」という物象化の極としてとらえられるのですが、「脳の中に構造としてはいっている」ということをいかなることから演繹しうるのでしょうか？まさに「無根拠」以外のなにものでもない、憶断ではないでしょうか？神の産出構造になぞらえることができます。この憶測が成り立ち得るなら、そもそも論考など何も必要でなくなるでしょう。柴谷さんは今西進化論の方法論を取り入れられています。今西進化論は仮説を立てて、それを現実には当てはめて行くという方法ですが、その実際の当てはめの作業が何も無いのです。差別が「消えるはずなのに残留し、なくなったとおもえばまた現れる」のは、差別ということをちゃんととらえかえしていないから、そのようにしか見えないだけなのではないのでしょうか？

柴谷さんの差別の根拠ということをごここに引用していない他のところから、いろいろ探っていると、どうもマイノリティー・マジョリティーの関係に求めているのですが、だからそういう視点でホモセクシュアリティということを押さえているのは評価できるのですが、女性差別の問題が鮮明になっていません。さらに、生産手段の所有からの排除と労働力の価値を巡る差別ということがすっぱり抜け落ちてしまいます。

差別を身体的差別—非身体的差別という分類していく志向も、近年の「身体とは関係性の分節である」という身体論の地平がとらえられていないように思います。

柴谷さんは差別の根拠ということをご物象化された相に沿って押さえて行くという作業をネグレクトしてしまっているが由に、差別を意識の問題としてしかとらえていません。

柴谷さんは、その世界観において、「現象を歴史によって説明する態度をすてて、歴史を構造によって（不変な構造の布置変化として）説明する。」構造主義の立場を明らかにしていますが、構造主義への批判、発生論と変動論がないという批判をどう対象化されているのでしょうか？マルクスの唯物史観（史的唯物論）の定式、土台と上部構造の問題を「そのような誤りの例としてカストリアディスのあげるのは、生産力にもとづく経済的土台が思想や文化、人間の意識のような上部構造を規定する、という理論である。実際には、ちょっと考えても、二つの実体が存在すれば、それは相互作用するはずであるのに、ここでは理論を建設するというマルクスの野心によって、こんなあたりまえのことが誤りとされ、人間存在を経済に還元する議論がまかりとおることになったというわけである。」（『反差別論』69P）と展開されています。マルクスをちゃんと読んだ人ならば、マルクスが土台と上部構造の相互浸透ということをごちゃんと展開していることは、重々承知しているはずだと思います。確かにこの土台と上部構造の問題を巡って、唯物（ただもの）論的な論考がマルクス曲解（マルクス自身も十全に展開しえていませんが）からまかりとおっていた現実があったし、今もあるのですが、そもそも物象化ということ抜きに土台が成立しない、物象化ということも含めて土台があるというごとらえかたをしていき、この土台—上部構造の問題を整理していく必要があると思いますが、この定式自体の有効性が消失したわけで

はないと思います。

例えば、マルクス自身が展開していることですが、生産概念を、物質の生産のみならず、類的生産、欲望の生産まで含んで考えることから、土台としての生産関係ということをとらえかえすことが唯物史観の見直しとしてすすんでいます。また、『資本論』が物象化論で貫かれているということや、その『資本論』の「商品の物神的性格」という項が重要性をもっていて、その「商品の物神的性格」抜きに資本主義経済が成立し得るのか？その「商品の物神的性格」というのは、経済かイデオロギーかと問うてみれば、意識の問題＝上部構造というような規定のしかた自体が問題になってきます。

唯物史観とは何か分かり易く言えと言われたら、日常的な意識として、「この世の中はお金が支配する世の中だ」という言い方とか、「愛情だけでは結婚できない」とか、「恋愛と結婚は違う」、結婚する時には出身階層が同じような人と結婚する傾向があるとか、倫理主義が利害の前で崩壊するとか、そのような収束傾向ということを唯物史観の分かりやすい中身として表現できるのではないかと思います。

マルクス主義という、人の名前を冠した思想性の表現は、権威という差別に連なることがあるので、私自身あまりしっくり来ません。また、マルクス自身は19世紀の人で時代拘束されていますし、立場性の拘束というところで（女性でない、障害者ではない）、当然そのことからの限界性ももっています。問題は批判しつつ何を引き継いで、自分たちの理論をつくっていくかということではないかと思います。

柴谷さんの批判にはそのようなマルクスのちゃんとしたとらえ返しができないような気がしています。

柴谷さんの論考を読んでいると、差別を差別意識の問題に切り詰めていて、そこにはマルクスのいう土台の問題がすっぱり抜け落ちているのでないでしょうか？

さらに、そこでの反差別の運動は「差別の問題は「モグラたたき」のように、ここをたたくとあっち、あっちを押したらこっち、というふうにならずでてくるんであって、それにたいしてはつねに有効かつ果敢にたたかうことをおいてないわけです。ユートピアを志向しても、ユートピアはできっこないし、仮にユートピアができれば、こんどはそれがこわれるのを心配しなければならない。だからユートピアははじめからあきらめてたたかいつづけることをもってユートピアに代置するしかないんです。」（『科学批判から差別批判へ』118P）という論理になってしまっています。差別ということはなくなりほしない、差別に対する戦いの過程が大切なのだということになり、「解放運動の目的を、解放に求めず、解放をめざして、たたかいつづけることのできる社会の建設にもとめることが、さしずめわれわれのとるべき進路・見通しにならねばならぬであろう。」（『反差別論』217P）

反差別の運動は確かにユートピアを求める運動ではないと思いますし、柴谷さん自身が『哲学の貧困』を引用したとして「われわれにとって、共産主義とは、招来せらるべき状態でもなければ、現実が指向すべき理想でもない、われわれにとってそれは、現状を廃絶しようとする現実の運動である。」（『反差別論』70P）と言われることは基本的に確認し

うることだと思います。しかし、そもそもその矛盾とは何かと問うて行く時、その矛盾が明らかになり、それをいかに解決するのかという方向性を示し、ビジョンを示し得ます。そのビジョンを示すということが、どのような社会を作って行くのかということまで、広がって行くこととしてあるのではないのでしょうか？それはユートピア志向とは違うと私は思います。『空想から科学へ』を読まれていると思いますが、頭の中で、ユートピア志向することと、土台をも含めて社会変革の道筋を示すということは、明らかにことなることです。

柴谷さんは、差別とはなにか、差別はいかに生まれるのか、という問いかけをネグレクトされ、差別はいつの世もあった、なくなりはない、という思い込みから（思い込みというのは、脳の中に構造としてあるということを憶測され、そこからすべてを演繹されているという意味において）、差別をなくす運動を放棄されています。

まさに、差別を差別意識としてとらえ、それをいかに押さえ込むかという倫理主義におちいつているのです。倫理主義というのは利害の前で消え去り、時には逆向きに変遷する。これが、歴史が示している現実です。この「利害」ということが土台と結び付く唯物史観キー概念の一つではないかと思っています。

柴谷さんのその倫理主義をみていると、ファシズムへの転化の恐れを抱いています。今は、差別する面と反差別の面を2つとも脳に組み込まれているとされていますが、厳密に言うと差別の面は組み込まれているが、反差別の面は単にあると表現されている箇所もあって、極めて危うくなっています。それが状況の変化で、反差別の運動が圧殺されていく状況下になりもすれば、差別する面だけが脳に組み込まれているのだという論理になります。そのように転化したときは、まさに、社会ダーウィズムの思想、ファシズムの思想そのものではないのでしょうか？

差別意識（フロイトの「無意識」のようなことも含めて）のないところに差別はないのですが、差別を差別意識の問題に切り詰めることはできないと思います。差別を土台（生産諸関係及び交通形態）からとらえ返し、関係性の問題として押さえる必要があります。確かに人の歴史とともに差別は始まったのですが、「差別とは人間の本性」というようなことではなく、関係性の問題であるということを世界観のパラダイム転換から問題にし、指摘しうることとしてあると思います（マルクスの思想はその中で「物象化」の概念として生き得るし、生かすべきこととしてあると思います）。差別の発生論を含めた根源的とらえ返しが今問われているのではないのでしょうか？

柴谷さんは、科学批判からまじめにものごとをとらえ返す作業まで放棄されたのでしょうか？「差別はいつの世にもあったなくなりはない」、ということを物象化としてとらえ返す作業から反差別論は始まるのではないのでしょうか？「差別が完全になくなるかどうかわからない」という指摘は繰り返されています。そのような客観主義は、闘う被差別者には無縁なものです。それこそ、そこに矛盾がある限り闘い、その闘いのなかで反差別の関係性を現実的につかみとっていくことが必要なのではないのでしょうか？柴谷さんは、「分

からない」とされるのではなく、「差別はなくなりはしない」ということまで出されているのですから、その根拠までちゃんと示されるべきではないかと思います。我々はそれを物象化として批判していくだけです。

障害者運動の先駆者と言われる人達の文にも、絶望からすべてが始まるという感じのニヒリズムを感じる文があるのですが、差別を固定観念をもたないでとらえ返す作業から、差別のない社会を生み出す運動の方向性がみいだせるのではと思います。